

名一達書返上

内務省

別紙琉球藩処分方法ヲ草シ謹而呈ス

明治十一年十二月四日 内務卿伊藤博文

太政大臣三條實美殿



琉球藩處分案

茲ニ琉球藩處分ノ方法ヲ設ケニトスルノ前ニ於テ
先ツ該藩從來ノ狀況ト處分ノ結果トノ大畧ヲ論シ
テ以テ之カ順序ヲ定メ廟議ノ裁制ヲ仰ク

從來ノ狀況ノ大畧

該藩ハ中興ノ國王舜天ヨリ當今ノ藩王尚泰ニ至ル
迄世數三十八代歷年六百八十六年國祖天孫凡二十
五紀年一萬
七千年餘ト云フ餘王統聯綿絶ヘスニテ土人永ク其一統治ノ
下ニ在リ昔時ヨリ本朝ニ屬シ中時ハ薩摩藩主ノ管
轄ヲ受ケ近時ハ政府ノ直管ヲ受クルト雖モ裁判兵
權貨幣領曆等ヲ除クノ外一切ノ政務ハ藩王ニ委任

セウレタルヲ以テ土人ニ於テハ藩王アルヲ知テ
天皇陛下アルヲ知テス藩政府アルヲ知テ本邦政府
アルヲ知テス隨テ藩王ヲ尊信スルノ厚キ實ニ無量
ニシテ藩王ノ為メニハ生命ヲ絶チ財產ヲ棄ルモ決
シテ惜マサルノ情アリ故ニ其藩政ハ實ニ壓制苛酷
ヲ極メタリト雖モ土人ニ於テハ藩王ヲ尊信スルノ
厚キト數百年來慣習ノ久シキトニ依テ格別厭苦ノ
情ヲ懷カサルニ至レリ然レモ尚ホ能ク之ヲ分拆シ
テ論スレハ藩王ヲ尊信スルハ士民一般ナリト雖モ
營業上租稅上宗旨上等ニ就テノ壓制苛酷ニ於ケル
士族以上ニ於テハ敢テ厭苦セサルモ土民ニ於テハ
多少ノ厭苦ナキニアラサルナリ而シテ其風俗タル
ヤ士族以上ニ於テハ閑雅清潔衣食住モ亦隨テ鄙野

ナラスシテ自ラ上等人士ノ風アリト雖モ土民ニ於
テハ無學ニシテ字ヲ知ル者少ナク弊衣徒跣矮屋ノ
土間ニ起臥シテ野蠻ノ風アリ熱地ニ在テ土人裸体トナサレ
ト其言語タルヤ本邦ノ古言ト彼ノ方言支那言トヲ
混淆スルト雖モ要スルニ一種ノ方言ヲナシテ更ニ
本邦人ニ通セス官吏ハ皆ナ本邦トモ其人氣タルヤ温
順儉樸禮讓信義ヲ尚ヒ藩吏ノ本邦ト支那トノ前二
ル事トシ高賈ノ鹿兒島高賈ノ麓絡ヲ免堅忍久シキ
ニ耐ヘテ營生ニ勞カスルノ質アツテ又固陋因循新
規ヲ忌ムノ癖アリ其民カタルヤ概子貧困ニシテ處
或ハ富豪氏ノ官吏多クハ富メリ政府ハ常ニ其石高租
稅秩祿會計戶口系統城郭社寺學校物產輸出ノ類々
ルヤ別表掲クル所ノ如ク其政治タルヤ文教人倫ヲ

原トシテ政教ヲ分タス兵備ヲ用ヒスニテ土人ニ寸鉄ヲ帶ハシメス敬神信佛ノ風アリト雖モ土人ニ宗旨ノ自由ヲ與ヘス文學ハ主トシテ孔孟ノ道ヲ講シ官府俗間ノ帳簿書札皆ナ本邦ト同シク明瞭ノ子弟及ヒ久米村人閩種ハ清國ノ書法ヲ學ヒ官吏ハ總テ本邦ノ御家流及ヒ俗文ヲ用ヒ土地ノ制度税法殖産貿易法等ニ於テハ其國勢ニ隨テ頗ル注意ノ事蹟ヲ見ルニ是ル而シテ往々本邦ノ制ヲ用ユルモノアツテ就中税法祭祀度量衡等ノ如キハ最モ本邦ノ制ニ依レリ然レモ要スルニ百事皆ナ壓制ノ主義ヲ免カレズ

處分ノ結果ノ大畧

茲ニ其將サニ處分ヲナサントスルノ時及ヒ處分ヲナシタル後ニ於テ果シテ何等ノ結果ヲナスヤヲ考フルニ前陳スル所ノ如キ狀況ナルニ依リ其處分ノ初メニ於テハ一時ハ非常ノ形勢ヲ發シ即チ士民一般痛哀不知所措業ヲ廢シ食ヲ忘レ狼狽動搖殆ニト狂氣ノ如ク必死ヲ以テ處分ヲ拒ムヲ是事トスヘシ然レモ兵力ナキヲ以テ干戈ノ所為ニハ及ハサルヘシト雖モ土人倭ノ辭スルニ石嘯聚強訴等紛擾ノ所為ニ至ラサルナク殆ニト反狀ヲ顯ハスヘシ而シテ固ヨリ孤島ノ人民ナレハ到底拒ミ得ルノ力ナク遂ニ命令ニ從フニ必セリ其處分ノ後ニ於テハ元是威服ニシテ心服ニアラサレハ隱頭百般ノ所為ヲ以テ政治ノ妨害ヲナシ最モ困難ナルハ土民字ヲ知ル者

少ナク言語通セサルヲ以テ政令ヲ布キ政治ヲ施ス
ニ皆ナ士族以上ノ者ヲ用ヒテ之カ媒介ヲナサシメ
サルヲ得ス而シテ其士族ハ則チ不平徒ナレハ上意
ヲ偽傳シ下情ヲ詐申シ實ニ土人ニ便益ナル事件モ
之ヲ不便不益トシテ告知スル等壅蔽離間至ラサル
ナク以テ政治ヲ妨害スルノ好手段トナス恰モ盜ニ
鍵ヲ保管セシムルカ如シ尚ホ之ヲ分析スレハ土民
ニ於テハ營業上租稅上宗旨上等ノ壓制苛酷ヲ免ル
、ニ依リ自然新政ニ陶冶馴致セラル、所アルヘシ
ト雖モ如何セン彼ノ不平士族ノ媒介ニ依ラサルヲ
得サルノ不便アルヲ以テ其實効ヲ見ル甚ク遠キナ
リ要スルニ政令ノ通暢政治ノ施行ノ間ニ於テハ終
始障礙アルヲ免カレスシテ内地ノ廢置縣ノ意外ニ

容易ナルノ比ニアラサルヘシ且彼ノ從來藩内ノ歳
入ト將來新政ノ歳出ト比較スルニ入資ノ以テ出費
ヲ支フルニ足ラサルヲアルヲ知ルヘシ

處分ノ方畧

該藩ノ處分タルヤ專ラ内治自主ノ權ニ屬スト雖モ
其條理ハ國憲上ヨリ出テ其事由ハ世界ノ論題トモ
ナルヘキ事件ニ付假令彼レハ微力ノ孤島ト雖モ之
レニ加フルニ不條理ヲ以テス可ラス然レモ元是非
常ノ變革ナリ平時ヲ以テ論スヘキモノニアラサレ
ハ徒ラニ條理ノミニ拘泥シテ變通ノ活法ヲ用ヒサ
ルトキハ處置ノ宜ヲ誤ルノミナラス却テ條理ヲ失
フヘシ故ニ政府適當ナリトスル所ノ目的ヲ達スル

為メニ一時嚴酷ノ處分ニ出ルモ其大體ノ條理ニ背
カサル以上ハ斷シテ之ヲ行フヘキノ理アルナリ因
テ此處方ヲナスニハ如何ナル方法ヲ以テスヘキヤ
ヲ考フルニ抑モ該藩昔時ノ事蹟ハ暫ク措キ中時ノ
事蹟就中維新以來ノ事蹟ニ基ツカサル可ウス抑該
藩ハ隸屬半主ノ國ニ非スシテ純然タル本邦治内ノ
一藩地ナリ方今該藩ノ体制我カ國體ニ適セサルモ
ノハ之ヲ改革スルニ何ノ憚ル所アラニヤ然ルニ先
年副島種臣外務卿奉職ノ時ニ當リ該藩ニ説クニ國
體政体永久變更セサルノ事ヲ以テス此言ヤ永遠變
ス可ウサルノ官令ニアラスト雖モ外務卿ノ職任ヨ
リ出タルモノナレハ全ク効力ナシトス可ウス故ニ
該藩ニ於テハ不朽ノ金言トシテ常ニ之ヲ主張シ旧

制ヲ維持スルノ辭柄トナセリ故ニ今俄然變革ヲ行
フニハ適當ノ條理ト辭柄トナカル可ウサルナリ而
シテ其條理ト辭柄トヲ求ムルニ去ル明治八年該藩
ニ對シ命令ノ個條ノ中清國へ隔年朝貢使ヲ派遣シ
清帝即位ノ節慶賀使ヲ差遣シ藩王代替ノ節清國ヨ
リ冊封ヲ受ル等ノ儀被差止ノ條ニ於テハ歎願ト稱
シテ今ニ至ル迄遵奉ノ書ヲ呈セス且九年該地ニ裁
判官ヲ被置候ニ付該藩裁判事務悉皆引渡スヘキ筈
ノ處是又歎願ト稱シテ今ニ至ル迄遵奉セス此ニツ
ノモノハ最重ノ事件ニシテ荏苒不問ニ置ク可ウス
其他幸池親方ヲシテ竊ニ支那ニ投シテ密訴セシメ
府下在留ノ藩吏ヲシテ東京駐劄ノ支那公使ニ密訴
セシメ及ヒ各國公使ニ出入シテ其周旋ヲ要ムル等

隱匿ノ所為ノ如キハ枚擧スルニ違アラス依テ此等ノ事件ヲ以テ變革ヲ行フノ條理名義トナシテ斷然廢藩置縣藩王東京住居等ノ處分アルヲ要ス然リト雖モ廢藩置縣ハ固ヨリ其藩王東京住居ノ一段ニ至テハ得失相半ハスルモノアリ何トナレハ廢藩ノ事ノミヲ行フモ土人ノ動搖豫知スルニ足ル加フルニ藩王ヲシテ其地ヲ去ラシメントスルトキハ條理ノ有無政治ノ利害ヲ尚フハ抑モ末ニシテ昧死藩王ニ離ル、ヲ拒ミ幾層ノ紛擾ヲ醸スヘクシテ到底強迫ノ處置ヲ以テスルモ行ハレズシテ遂ニ兵威ヲ以テ拘引スル等ノ友人同一ノ處置ヲナサ、ル可ウサルニ至ルモ不可測勢茲ニ至ラハ臨機ノ處分ヲ以テ先ツ廢藩置縣藩王ハ居城ヲ退去シテ別莊ニ住居セ

シムルニ止メ而シテ終始縣治上ノ妨害ヲナスノ所為又妨害トナルヘキ勢ヲナストキハ何等ノ時ヲ論セズ斷然東京ニ住居セシムルノ處置ヲ執行スルモ敢テ遲シトセサルナリ然レモ土人ハ堅忍因循ノ氣質ナレハ五個ノ事件ヲ要スルトキハ十個ノ事件ヨリ及ホシ輕キヲ要スルトキハ重キヨリ責メサレハ容易ニ結局ヲ見ルヲ得サルニ付先ツ最初ハ藩王東京住居ヲ命シ種々ノ歎願ニ依テ當分其地ニ滯住ヲ許サル、ノ順序津島、鹿島、例ニ滯住スルトナシテ漸クニ居城退去別莊住居ノ事行ハルヘキ乎又以上数件ノ處置ヲナスニモ將來縣治ヲ行フニモ嚴威ヲ示シ實力ヲ備ヘテ以テ兇暴ヲ豫防シ安寧ヲ保護セサル可ウサルニ付相應ノ成兵ヲ要ス然レモ廢藩置

縣ノ發令ト同時ニ兵ヲ送ルトキハ討伐ノ處置ト謬
誕ニ無謂動搖ヲ招クヘシ故ニ發令ヨリ以前ニ於テ
若干ノ増兵ヲ該地ノ分營ニ送ルヘシ而シテ後此處
分ノ任ヲ受ケタル一行ノ官吏ト縣官ニ任セラレタ
ル一行ノ官吏ト同時ニ入琉スヘキヲ要スルナリ而
シテ處分長官其奉命事件ノ始末ヲ了ヘ縣令ニ引渡
シタル上將來ノ縣治ニ於テハ決シテ美治ノ急施ヲ
要ム可ラス土地ノ制ヤ風俗ヤ營業ヤ凡ソ該地士民
旧來ノ慣習トナルモノハ勉メテ破ラサルヲ主トシ
就中家祿ノ處分社寺ノ處分山林ノ處分等ノ如キハ
内地旧藩處分上穩當ヲ失シタルモノ、覆轍ヲ蹈マ
サルヲ注意シ只租稅上營業上警察上教育上宗旨
上等ニ就キ旧規ヲ改良シテ士民ノ便益トナリ又情

願ニモ適スヘシト確認スルモノ、ミヲ改正スルニ
止ムヘシ是彼ノ縣治ノ一大主義ナリ其經費ノ如キ
ハ別紙概算スル所ノ如ク歲入ノ以テ歲出ヲ支ユル
ニ足ラスト雖モ抑モ此變革ハ國憲不得已ニ出ルモ
ノニ付其入費ノ如何ニ依テ行止ヲ決ス可ラサルナ
リ乃チ別紙琉球藩處分ノ順序ヲ草シ以テ聞ス

琉球藩處分方法

第一條

處分發令ノ以前ニ於テ藩地ノ分管ニ若干ノ兵員ヲ増スヘシ

第二條

處分ノ手順ノ整ヒ次第左ノ通御達アルヘシ

琉球藩

其藩ヲ廢シ更ニ沖繩縣ヲ被置候條此旨相達候事

但縣廳ハ首里城ニ被置候事

年月日

太政大臣

琉球

第三條

前條ト同時ニ藩王ニ對シ 勅書ヲ添テ左ノ通御
達アルヘシ但 勅書ハ左ノ御達ノ旨趣ヲ取り別
ニ起草ヲ要ス

琉球藩王尚泰

去ル明治八年五月廿九日ヲ以テ清國一隔年朝
貢使節ヲ派遣シ清帝即位ノ節慶賀使ヲ差遣シ
藩王代替ノ節清國ヨリ冊封ヲ受ル等ノ儀被差
止ノ旨被相達候處歎願ト称シテ于今遵奉ノ書
ヲ進呈セス且九年五月其地ニ裁判官ヲ被置候
ニ付其藩ノ裁判事務悉皆可引渡ノ處是亦歎願

ト称シテ于今遵奉不致等ノ始末ニ於テハ實ニ
國憲上難被閣次第ヲ以テ廢藩置縣被 仰出候
條此旨可相心得候事

年月日

太政大臣

第四條

前條々ト同時ニ左ノ通御達アルヘシ

琉球藩

今般其藩被廢候ニ付テハ右為處分何官何果出
張被 仰付候ニ付諸事同人ノ指揮ニ依テ可取
計此旨相達候事

年月日

太政大臣

第五條

前條々ト同時ニ左ノ通御布告アルヘシ

琉球藩ヲ廢シ更ニ沖繩縣ヲ被置候條此旨布告候事

但縣廳ハ首里城ニ被置候事

年月日 太政大臣

第六條

前條々ト同時ニ左ノ通御達アルヘシ

東京琉球藩邸在番

親方

其藩吏東京在番ノ儀自今廢止候條早々歸藩可

致此旨相達候事

年月日 太政大臣

第七條

内務省ノ官吏中ヨリ撰ニテ處分ノ任ヲ被命同時ニ縣令書記官警察吏屬官等モ命セラルヘシ但シ人撰等ハ廢藩後令ヨリ以前ニ御内定ヲ要ス

第八條

處分官縣官等入琉ノ上ハ左ノ處分ヲ行フヘシ

第一 處分長官ヨリ元藩王ニ左ノ御達書ヲ渡

スヘシ

華族

何位尚泰

自今東京住居被 仰付候事

年 月 日 太 政 大 臣

第二 處分長官ヨリ元藩王ニ對シ首里城ヲ明
ケ渡シ東京へ出發マテハ別荘ニ住居ス
ヘキ旨ヲ申渡スヘシ

第三 處分長官ヨリ元藩王ニ對シ家屋倉庫地
所金穀船舶其他諸物件ノ從來藩ニ屬ス
ル所ノモノト元藩王尚氏ノ家ニ屬スル
所ノモノトヲ引分ケ具申スヘキ旨ヲ申
渡シテ具取調ヲ監査スヘシ但該藩從來
藩王家政ニ屬スル費資ト藩政ニ屬スル
費資トハ其收税上ヨリ區別シテ不混ノ
法アリ故ニ其從來家政ニ屬スル分并ニ

別荘菩提寺墳墓地其他判然所有ニ屬ス
ル動産不動産内器物モ此ハ元藩王ニ與
ヘ其他ハ官物ト定メテ然ルヘシ詳細ハ
其事物ニ就キ其主管ノ省ニ稟申シテ定
ムヘシ

第四 前條々整頓ノ上ハ處分長官ヨリ元藩王
ニ達シテ縣令ニ引渡シノ手續ヲナサシ
ムヘシ

第五 元藩王ノ東京住居ノヲタル殊カヲ盡シ
テ歎願固辞スルハ必然ナリ此場合ニ於
テハ處分長官ハ其願書ヲ受ケテ政府ニ
進達シ政府ハ暫ク之ヲ寛待シテ琉球滞
在ヲ御許可アルヘシ

第六 租税ノ事秩祿ノ事等具他前途處分ヲ要

スル事項ハ處分長官ニ於テ取調、縣令

ニ協議ノ上主管ノ省ニ具狀スヘシ

第七 處分ヲナスニ當リ土人狼狽騷擾スルハ

必然ニ付可成説諭スヘシト雖モ若シ兇

暴及人ノ所為ニ及フト認ルトキハ分官

ニ謀リ兵威ヲ示シテ鎮撫スルモ苦シカ

ラス

第八 元藩王居城ヲ去ラス又ハ御達ノ條件ヲ

遵奉セスニテ頑然背及ノ所為ヲ顯ハス

時ハ亦分官ニ謀リ兵威ヲ示シテ處分ヲ

ナスモ苦シカラス

第九 縣令ハ元藩王ヨリ諸般引渡シナキ以前

ト雖モ人民ニ命令告達等ハ固ヨリ其職
分ニ於テ當然處分セサル可ラサル事件
ハ順次着手シ且警察ノ事ハ最モ怠ル可
ラス

第九條

處分官滞琉中ハ勿論以後ト雖モ毎月一回ノ郵便
汽船ノ往復ヲ開クヘシ

第十條

元藩王ヨリ諸般縣令ニ引渡シ且處分長官ニ於テ
モ諸事取調ヲ了レハ處分官ハ不殘帰京スヘシ

第十一條

處分長官帰京ノ場合ニ至レハ同地内務省出張所

ヲ廢シ處分官ト同時ニ歸京スヘシ

第十三條

長州ヨリ琉球ニ海底電線ヲ通スルニ

第十四條

琉球縣ニ裁判所ヲ置クヘシ

第十五條

縣治ヲ行フニ土地ノ制ヤ風俗ヤ營業ヤ凡ソ該地
士民ノ慣習トナルモノハ勉メテ破ル可ラス就中
秩祿ノ處分社寺ノ處分山林ノ處分等ノ如キハ内
地旧藩處分ノ稔當ヲ失シタルモノ、覆轍ヲ蹈ム
可ラズ只租稅上營業上警察上教育上宗旨上等ニ
就キ旧規ヲ改良シテ士民ノ便益トナリ又情願ニ
過スルモノト確認スルモノ、ミヲ改正スルニ止

ムヘシ

琉球便覽

表中心籍人員學校生徒及寄泊人員入津ノ船數等ハ出張中現場ノ所算ヲ以テ之ヲ記ス
歲入歳出ノ如キハ藩廳ノ記録ヨリ得ルハ尚後ノ正算ヲ要ス

管		下	
琉球	國	一	圓
屬	島	久米嶋	伊忠嶋
宮古嶋	伊平屋嶋	渡名喜嶋	伊平屋嶋
屬永良平	鳥嶋	粟國嶋	鳥嶋
多良間		計羅馬嶋	
久里間			
大神			
島池間			
面那			
島武富			
大濱			
安良城			

石 九万四千二百三十石七斗九勺四文
高 本琉球七万五千三百三十四石六斗八勺八合七勺二文
尾島 一万九千九百六石一斗二合二勺二文

幅員 南北里程 凡三十四里二十五丁余
東西里程 凡廣所五里二十八丁狹所二十六丁余

周圍 島廻凡百十里十五丁四十間

郡數 三十九郡 本琉球三十五郡
村數 五百八十七ヶ村 本琉球四百五十九村
屬島 百五十八村

至元三十八代歷年六百八十六年
天孫氏二十五紀年間凡一万七千年餘舜天王ヨリ當代尚泰二

校		囚獄		締約國			物								
生徒	入牢士分	現員	平民	米	佛	蘭	琉球ヨリ輸出之物品								
四百五十八人	二人	三人	女	安政元甲寅年六月十七日西洋千八百五十四年立約	安政三乙卯年十月十五日西洋千八百五十五年立約	安政六己未年六月七日西洋千八百五十九年立約	之現今居留人ナシ								
生徒	二千八十六人			三ヶ國人民墳墓ノ地ヲ泊村ノ内ニ設クキ旨條約面ニ記載有			品名	員數	價格	品名	員數	價格	品名	員數	價格
							砂糖	六百五十方竹	百竹	下芭蕉布	千反	六十五貫文	紺地木綿	十方反	百二十五貫文
							細上布	二千五百反	百二十五貫文	鬱金	四百五十方竹	細米	三千方反	百七十五貫文	
							綿	千反	百二十五貫文	葛	千本	綿	千反	百二十五貫文	
							細	千反	百二十五貫文	泡盛	三万竹	白緋上布	千反	百二十五貫文	
							白緋上布	千反	百二十五貫文	海人草	六百本	同上下布	千反	百二十五貫文	
							同上下布	千反	百二十五貫文	塩		紺上布	千反	百二十五貫文	
							紺上布	千反	百二十五貫文	豚					
										漆					
										器					

輸		出		鹿兒島縣下ヨリ琉球ニ輸入高		
品名	員數	價格	品名	員數	價格	品名
唐傘	五千本	九貫文	米	九一万石	百四十貫文	漆
黒次繩	一万竹	九貫文	大豆	七万石	百七十貫文	鯉節煙草
赤次繩	五千竹	九貫文	菜種油	六千俵	百四十貫文	酒
			茶	一万竹	百四十貫文	蠶ノヒレ
			蠟	二千竹	百三十貫文	干
			荏油	二千竹	百三十貫文	鮑
			桐油	二千竹	百三十貫文	海
						蠶

琉球宝貨銅寛永通宝 内地通用一枚ヲ以五十文ニ通スレハ市場物品ノ價ニ右割合ノ相場ナレハ則金壹圓ヲ以五十貫文替ノ計算ナリ

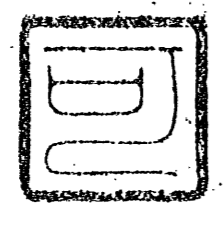
代價總計凡金二十四万三千三百圓余

入		高	
負數	八万行	代價總計	凡十九万五千四百圓余
價額	百貫文	輸入物品	ハ從前鹿兒島縣下ノ引取ニ付同所物品相場ノ價額ヲ以計算ス但ニ同縣下錢相場現時金壹圓ニ付平均三十三貫文位ナレハ物品ノ價額モ右相場ノ割合タルヘシ
品名	西洋反布	品	同
負數	品	品	同
品名	小間物類	品	同上
負數	同上	品	同上
品名	紙類	品	同上
負數	三万行	品	同上
品名	鬚付油	品	同上
負數	五千行	品	同上
品名	鍋	品	同上
負數	千五百反	品	同上
品名	鐵	品	同上
負數	千	品	同上
品名	板類	品	同上
負數	反	品	同上

明治十一年十二月

書記官

内務卿ニ申琉球藩處分ノ儀



大臣為

參儀



右審案ハ系該件ニ於テハ國憲上ニ關係シ

在萬難被閱、而然之、俟以、得兵、少一、回、口、
智、責、之、也、俄、然、所、以、字、之、相、與、以、六、聊、德、而、
、之、キ、ハ、様、之、存、ハ、依、ハ、此、際、官、負、ヲ、派、遣、之、屹、
、度、智、責、ヲ、被、加、科、底、道、奉、五、條、之、於、以、斷、
、能、列、紙、ハ、子、續、ヲ、以、所、以、字、之、也、依、
、所、違、案、ヲ、具、之、仰、裁、可、也、
、但、該、藩、之、系、ノ、官、吏、ハ、此、際、均、藩、ヲ、作、付、
、之、也、
、被、為、ハ、事、

御違案

琉球藩王尚泰

去、此、明、治、八、年、五、月、廿、九、日、以、テ、清、國、一、
、隔、年、朔、頁、使、節、ヲ、派、遣、之、清、帝、即、位、
、之、也、慶、賀、使、ヲ、差、遣、之、藩、王、代、替、ノ、節、
、清、國、ヲ、冊、封、ヲ、受、ル、等、ノ、儀、被、差、止、ノ、旨、
、被、相、違、以、テ、字、之、歎、願、ト、稱、之、于、今、遵、奉、書、
、ヲ、進、呈、セ、且、九、年、五、月、其、地、之、裁、判、官、ヲ、
、被、置、ハ、以、其、藩、ノ、裁、判、事、務、委、諸、可、引、
、後、ノ、事、ハ、是、各、歎、願、ト、稱、之、于、今、遵、奉、書、不、
、致、ホ、始、末、實、以、不、相、濟、事、ハ、此、上、道、奉、
、不、致、之、於、以、相、商、ノ、旨、分、之、及、ノ、ハ、シ、此、旨、智、責、

小事 十二年一月六日



大政官

東京琉球藩邸在番

親方

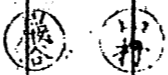
其藩吏東京在番、儀自今廢止、此條
早、歸藩可致、此方相違、小事

十二年三月廿七日



十二年十二月廿七日

書記官



大臣



東京在留琉球藩吏、歸藩、此御付、
由務省、御達、上、案

別紙之通、東京在留琉球藩吏、御達、
相違、此、便、船、之、都、今、亦、於、其、者、御、付、
以、此、條、之、歸、藩、之、為、致、事

大政官

内務大臣松岡洋右

右の如く申すに院政を廢す

如法に御承知す

松岡洋右

在りしに申すに在り

院政への必要あり

の便に都の了に於て

院政の了に於て

院政の了に於て

三月廿七日

白布書ハ伊豆公ハ也又曰物成中
右限寺修多羅議ハ也中修多羅

一在東京院院舊部車書

齋白ハ也

寺白也

伊東之信

一杉田出也

一伊勢之寺

白伊東之信

寺白也

御用者之琉球藩、出張被仰付
事

内務大書記官松田道之

明治十二年十二月廿七日

太政官